

カウンセリングを通して見た仏教と キリスト教との比較

問題の提起

近來カウンセリングの普及に伴い、仏教やキリスト教でも改めてカウンセリングが問題となるに至った。今回は心理学としてのカウンセリングを媒介として、仏教カウンセリングとキリスト教カウンセリングとを比較して見ようと思う。ただその場合仏教カウンセリングは現にわたくしどもの主張し実践しているものを基準とし、キリスト教カウンセリングは主として近藤裕師の『キリスト教カウンセリング入門』を参考にしたこととした。もとより現段階においてはまだ問題の提起というに過ぎないのであり、殊にキリスト教カウンセリングについては認識不足や誤解もすくなくからぬことと思う。何れにしても最初の試みであろうから、是非大方のご叱正をお願いする次第である。

藤 田 清

カウンセリングの比較に入る前に、キリスト教と仏教との教化方法の根本的な差違について一言する。キリスト教といってもカトリックとプロテスタントとでは教化の態度にも大きな違いがある。カトリックでは告解が重視されるが、プロテスタントでは説教が重視され、その教会もまた「神のことばの教会」といわれるのである。カトリック信者は教会にお参りに行くが、プロテスタントの信者は説教を聞きにゆくのであるといわれる。プロテスタントの教会における説教の内容は、予言者や使徒たちに語りかけられた神のことばはもとより、その後説教者がそれを講解しながら、それぞれの時代に向けて語ったことばも神のことばであるとせられる。従って神のことばを語る時、おのずから權威的となり、有的な（語るべき内容を明確にしている）、指示的なあり方となる。こうしたプロテスタント教会にあっては、カウンセリングの

行われるのは主として牧会活動の場であり、そこで行われるカウンセリングもまた非指示的なあり方となるといわれる。

仏教の場合、現在その教化方法はほとんどキリスト教とえらぶところがなく、いわゆる説法も大衆に向って教理や宗義を説くのが普通になっている。これは明治以後のキリスト教の影響によるところが多いといわれる。一般的に西洋崇拜のためのみならず、キリスト教に反対し批判するためにもまたその影響をこうむったのである。しかし釈尊に始まる仏教本来のあり方は、むしろカウンセリングそのものであった。最古の経典として知られる『スッタニパータ』にいうように「わたくしはこのことを説くということがわたくしにはない」のである。それはまた原始経典に限らず、大乘経典においても、例えば『法華経』『法師品』の弘経三軌に見るように、説法の為には「如来の座」すなわち「一切法の空」に坐することが求められるのである。その具体的なあり方は「普門品」に見る観世音菩薩のように、相手の好むところに従って三十三身を現じ、相手に応じて説いて十九説法を行っているのである。これが仏教の説法の特色とせられる応機説法のあり方であって、機は一人一人異なるものであるから、それは三十三に尽きるものでもなければ、十九に止まるものでもない。帰するところは一人対一人のカウンセリングに外ならないのである。しかし仏教本来のあり方としての（仏教）カウンセリングは、（心理学的）カウンセリングの普及する今日まで、方法的には全くといってよい程

自覚されることがなかった。

心理学的カウンセリング

今日のカウンセリング、心理学的カウンセリングもその発生はキリスト教に基づくといわれている。キリスト教にあっては、カウンセリングという言葉からしてキリスト教用語として古くから用いられていたらしく、牧師をさしてカウンセラーといったこともあるということである。またカウンセラーの典型としてイエス・キリストを考える人もあり、カウンセリングの方法の発生をカトリックの告解から考えるものもある。その場合カウンセリングは全く世俗的な一種の告解であるといえよう。

しかしその発祥はともあれ、今日の心理学的カウンセリングは、すでにキリスト教とは別個の存在である。その学説も数多く提唱せられているが、普通これを大別してカウンセラー中心の指示的方法とクライエント（来談者）中心の非指示的方法と両者の折衷との三種とする。その中、今は非指示的あり方を主張したロジャーズの「治療における人間変容の必要にして十分な条件」を基準にすることにした。この説を用いる理由は、ロジャーズの学説が従来広く日本のカウンセリング学界に普及していたこと、その主張が極めて根幹的であって、他の学説を奉じるカウンセラーの間でも広く行われていることによるものである。その外列挙している条件が単純に比較に便利であるということが挙げられよう。

彼は建設的な人格変容が起るためには、次のような条件が存在し、それがかなりの期間継続することが必要であるとして六箇条を挙げてゐる。今伊東博氏編の『カウンセリングの理論2』所収のものに依つてその条件の大略を次に記すと、

一、二人の人間が心理学的な接触をもつてゐること

二、クライエントは不一致の状態にあること

三、カウンセラーはこの関係の中で一致しており、全体的統合をもつてゐること

四、カウンセラーは、クライエントに対して、無条件の積極的尊重を経験してゐること

五、カウンセラーはクライエントの内部的準拠棒について共感的な理解を経験しており、そしてこの経験をクライエントに伝達するように努めてゐること

六、カウンセラーの共感的理解と無条件の積極的尊重をクライエントに伝達するということが最低限に達成されること

以上のごとくである。以下これらの六箇条を軸にし、その範囲をカウンセリングに限定して、仏教とキリスト教との比較を試みることにしよう。

典型としての創始者

仏教カウンセリングとキリスト教カウンセリングとを比較するとき先ず最初に考へるべきことは、その教祖のことであろう。仏

教カウンセリングの場合いうまでもなく、その創始者は釈尊であり、その典型もまた釈尊である。この点キリスト教はイエス・キリストではないかと思ふ。しかし細部にわたつて研究すれば、その教祖乃至典型としてのあり方にも仏教には仏教の特色があり、キリスト教にはキリスト教の特色があるであらう。キリスト教の場合は、四福音書を中心に研究すればその大筋はうかがい得られるが、仏教の場合は小乗あり大乘あり、資料も浩瀚であつて、これを整理することは容易でない。キリスト教カウンセリングにあつては、今日すでにイエスにならつての実践を、可成綿密な分類の上に立つて実践されているようであるが、仏教の場合は今はまだ極めて大づかみに考えられている段階である。

仏教に限つて今その要点をあげると、仏教は教理的には縁起觀に立つことによつて、その教化の方法はカウンセリング的とならざるを得ず、その内容もまたインド仏教文学史の著者ヴィンターニッツが、釈尊の説法のあり方を記して、

仏は外見上、まず全然反対者の立脚地に立ち、反対者と同じ見地から出発して、同じ議論の方向、ときには屢々同一術語まで使つて以て、不知不識の裡に反対者を、反対者かれ自身と全然反対なる見地に伴ひゆくのである。(中野義照・大仏衛共訳)といつてゐることきものとなる。或はまた『大智度論』に説いてゐる四悉檀(世界・各々為人・対治・第一義の各悉檀)の如く説法のあり方、進め方を分類したものととなる。これらは今後原資料

たる大小乗經典の検討の上で、一層その具体的なあり方が明瞭にせられねばならない。その見地から『維摩經』のような説法のあり方を説いた經典の研究は極めて重要である。

カウンセリングの構成

仏教殊に大乘仏教においては、カウンセリングの構成はカウンセラー、クライエントの両者と、その間にとり交される言葉の三者として考えられる。この場合、三者はこれを切り離すこととはできないのであって、カウンセラーをとりあげれば、言葉とクライエントとはそれに伴ってあがってくる、クライエントをとりあげれば、カウンセラーと言葉が、言葉をとればカウンセラーとクライエントとが相伴うことと関係においてあり、これを三輪という。そこにいわゆる神とか仏とかの媒介的な存在を説かない。仏教にいわれる三輪清浄が仏教カウンセリングなのである。

ところがキリスト教カウンセリングにおいては、カウンセラーとクライエントの外に、キリストの福音とのかかわりが重要である。それはキリストの福音とのかかわりにおいて、相対する隣人のパーソナリティが成長することを助ける助力関係であるとせられる。

人間観と技術

カウンセリングの技術は、必ずその根底に人間観の問題がある。

普通この問題を論ぜず、単に技術論のみが取り上げられるようであるが、それではカウンセリングのごとき人間変容ということには結び付き難い。もちろんこの問題を殊更に問題とはしない場合でも、或る種の人間観を前提にしている場合もあるであろう。

仏教カウンセリングやキリスト教カウンセリングの場合、その前提となっている人間観が問題なのであって、その人間観によってその技術が成立するのである。しかしその人間観もその全体よりも、人間苦をどう見るかが当面の問題となる。カウンセリングは人間苦を解決するためのものであるからである。

仏教の場合人間苦は如何にして生れるかといえ、これを苦、集、滅、道の四諦説によって考えることができる。山口益博士によれば、人間の現存在とはその内外能所が相依相関的に働いているものの上に愛憎違順して苦悩している事実（苦諦）であるが、その苦悩は、相依相関的にあるものを実体的に固執する無明によって心の動くことより、種々の因縁が集まり起っているもの（集諦）に外ならない。故にその内外能所が相依相関的に起っている如実の相が実の如くに眺められて、内外能所を実体視することから起こる分別戲論が止滅するならば、そこに苦悩の滅尽（滅諦）がある。由つてその分別戲論の止滅である空性を証得する道を勤修すべきである（滅諦）とせられる。

以上の見地に立つときカウンセリングは滅諦の行にあたるのであって、その目的は分別戲論を止滅して如実の相を實の如くに眺

め得るようにさせるにある。それは内外能所の実體観を転じて相
依相関視せしめるにある。見方の転換こそ空性証得の道であり、
それを助けて可能ならしめることこそわたくしどものいう仏教カ
ウンセリングの意義なのである。このことが分かれれば、仏教カウ
ンセリングは見方を転換させるカウンセリングであり、その為には
相手を戲論的実體観に止まることができないようにさせるもの、
論理的にいうところの帰謬法が重要視されてくるのである。古来
の仏教化方法として特にその実践的究明が要望せられる。わた
くしどもはこれを、カウンセリングの方法として「否定的啓発法」
と名付けている。曾て問題となつた折伏のごときも、一種の否定
的啓発法であろうか。

ところでこの問題をキリスト教カウンセリングではどう考える
のであろうか。何といつても苦悩の原因としては先ず原罪が考え
られる。わたくしどもも仏教徒にも宿業観があり、一応は原罪観に
対応することくであるが、宿業も所詮は内外能所の相依相関を実
体的に固執する無明に帰着して考えられるものであり、その転換
は「さとり」であるとせられる。ところでキリスト教における原
罪とは、人は神に作られ、神から意志の自由を授かりながら、貴
い自由を勝手に用いて、神に反逆することである。これに対する
神の救いの業はイエス・キリストの十字架と復活とにおいて頂点
に達した。神は、これによって人類の罪を免し、罪によって絶た
れた神と人との交わりを回復したとせられる。罪なき神のひとり

子が、人類の罪を背負って、自らを犠牲として捧げ、神はこの犠
牲を受け入れて、人類の罪を免し、かつイエスを復活せしめた。
こうした原罪観に立ち、イエス・キリストの十字架と復活とを信
じることによって罪がゆるされるのであるから、その救いは信仰
によって得られるのである。その意味からいえばキリスト教カウ
ンセリングはクライエントに信仰を得しめることにあるといえよ
う。したがってその方法もおのずから仏教のさとりと異ならざ
るを得ないであろう。

心理学的な接触

以下ロジャーズのあげた条件に従つて逐次仏教カウンセリング
とキリスト教カウンセリングとの比較を試みることにしよう。第
一条件はこれに続く他の条件の前提ともいうべきものであつて、
それは二人の人間がある程度の接触を持ち、更に両者の経験領域
の知覚にはいくらかの差異が認められるということであると、せ
られる。

この第一条件においては、仏教もキリスト教も、この条件を欠
いてはそのカウンセリングは成立しないものである。従つてこの
条件については両者は畧同一であるといつてよい。

不一致の状態

第二の条件はクライエントが不一致の状態にあり、傷つきやす

い、あるいは不安の状態にあることが必要であるとせられる。この場合不一致というのは、知覚された自己と現実の経験との間に、基本的な不一致があるという意味であるといわれる。

この条件もカウンセリングの実践の場においては殆ど疑問の起る余地のないことであって、恐らく仏教とキリスト教とで異なることはないのであろう。ただ仏教的な考え方をするとキリスト教的な考え方をすると人との間には、不一致の状況において異なるところがあるかも知れない。たとえば仏教者にあつては無明から生じる我執が不一致をもたらし、キリスト教にあつては神に対する傲慢がそれにあたるということがときにそれである。しかし今の場合は、そこまで立入って考える必要はないであらう。

一致した状態

第三の条件は、カウンセラーが、この関係の範囲内では、一致した、純粋な、統合された人間でなければならぬ、ということである。彼はこの関係のこの時間において、正確に自己自身であることが要求せられる。

この条件もまた仏教カウンセリングにもキリスト教カウンセリングにも共通した条件ではないかと思う。ただそのあり方においては両者の間にはおのずから差違があると考えられる。仏教カウンセリングにおいては、カウンセラーはクライエントに精神を集中することによって無我となり、自己の一致すなわち自他の一致

が得られるのではないであらうか。この場合特に注意しなければならないことは、精神を集中するということが、強いて行われるのではないということである。とらわれるところのない精神の集中によって却つて真の自由が得られるのであつて、指示的方法、非指示的方法、両者の折衷等種々なカウンセリングの方法の何れにも拘わらず、何れをも駆使することが可能となるのである。

キリスト教カウンセリングの場合にはいかなる方法が用いられるのであろうか。神への祈りが重要な意味を持つのではないかと思う。この点わたくしどもも仏教カウンセリングに臨むカウンセラーの心構えとして、礼拝と唱名とをみずからも実践し人にもすすめているのであるが、いかがなものであらうか。

無条件の積極的尊重

カウンセラーがクライエントの経験のすべての側面を、そのクライエントの一部として暖かく受容していることを経験しているならば彼はそれだけ、無条件の積極的尊重を経験しているのである。これは人間を高く評価するところに生じるあり方である、とせられる。

このあり方の根底にある人間尊重については仏教の悉有仏性、キリスト教における神の被造物としての人間の平等が考えられよう。

また受容については、仏教カウンセリングにおいては摂取が考

えられる。摂取はまた不捨ともなり、一切を、無条件に受容するの意味である。

キリスト教カウンセリングについては、プロテスタントイズムの中心的教義である「義認」の教義、すなわち、「罪人にして義人とされる」という逆説的な世界が、カウンセリングの受容という概念によって、より明確に説かれていとせられる。

受容のための条件としての「聞く」については、仏教カウンセリングもキリスト教カウンセリングも等しく重視するが、今はボンヘッファーの言葉を引用しておくにとどめる。

キリストご自身は偉大なきき手であり、キリスト者はそのみわざの一部に関係しなければならぬのである。われわれが神のみことばを語ることできるためには、神の耳をもってきかなければならない。

共感的理解

第五の条件は、クライエントの自己自身の経験についての意識に対して、カウンセラーが正確な、共感的な理解を経験するということである。クライエントの私的な世界をあたかも自分自身のものであるかのように感じとり、しかも「あたかも……のように」という性格を失わないことが共感である、とせられる。

仏教カウンセリングにあつては同事行をもつてこれにあてることとがきよう。同事は摂取受容の反面であつてカウンセラーの立

場からはクライエントを摂取するのであり、摂取せられたクライエントの側から見れば、カウンセラーが進んでクライエントに近付いたということであろう。観世音菩薩の三十三身のようにクライエントの好む形をとるといふのも、クライエントの身になるの意味である。

キリスト教カウンセリングにあつては、コリント人への第一の手紙に見るパウロの言葉のことがこれにあたるであろう。

……弱い人には弱い者になった。弱い人を得るためである。すべての人に対しては、すべての人のようになった。なんとかして幾人かを救うためである。(九・一二)

理解の伝達

最後の条件は、クライエントが最低限度、カウンセラーが彼に対して経験している受容と共感とを知覚するということである、とせられる。

仏教カウンセリングでは、特に知らせるといふ、いささか押付がましい態度をとらず、対話のスムーズな進行によってそのことは可能となると考へる。対話の進め方は、話し手が聞き手となり、聞き手が話し手となり、互いに転換し交流しながら進行してゆくのである。対話にあつては聞き手と云い、話し手というものはあつても固定したものではないから、対話の進行にもなつて能所が寂滅して、その仕切がとれ、仕切がとれることによつて能所が

転換するのである。ここにいう能所寂滅、能所転換は、そのまま中観の実践そのものであり、そこに仏道が具体化されるのである。この点についてはキリスト教カウンセリングも多くは異ならないのではあるまいか。

最後に結論めいたことを一言すると、本稿は劈頭にもお断りしたように問題の提起以上のものではないのであるが、それにも拘わらずなお次のようなことがいえるように思う。一つは仏教とキリスト教と聞けば、大きな差異があるように思われるけれども、教化方法殊にカウンセリングについて考えて見ると案外に近似しているのではないかということである。今一つは明治以来の仏教とキリスト教との関係をこうした教化方法の面からも、単に仏教の側、キリスト教の側からのみ見るのではなく、その相互に関連し影響した過程を、客観的に研究して見る必要があるのではないかということである。

(おじた・きよし、国文学、四天王寺女子大学教授)